
身悶える魔王の指先

伊鳥ひな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身悶える魔王の指先

【Nコード】

N4802W

【作者名】

伊鳥ひな

【あらすじ】

魔の手から国民を守るために尊い身を投じた気高く美しい王女スノウティナと、そんな王女を愛した美丈夫な魔王ミケラヘイム的美談——に見せかけたただの変態がたくさん出没する物語。「極上の絹系の髪、なめらかな陶器の如く引き寄せられる肌。……ああ、今日もなんて美しいんだ僕は！」「いいから離れてよウザい！」「真実は伝説の斜め上を一人歩きする。お下品ラブコメ時々シリ阿斯。<自HPからの転載作品です>

01・身悶える

かつてアルスヴィドが「神々の息吹く国」と呼ばれた輝かしき時代は遠い過去と思われた。

原初、神は天より見下ろせる荒野に地を作り、自らに似せた器を作り、数十年程の寿命を与えたという。

神は彼らを「人」と呼び、人に知恵と力を授けた。

以降、人は創造主への感謝を忘れぬよう神に祈りを捧げ、神は人から真摯な「祈り」という力の源を受け取る。

神が天に還り数千年を経た今でも、その祈りは形を変えていない。

加護と祈りにより理が成り立つ世界。その中心に位置するユヴェール大陸に於いて、その面積の大半を占める国家は存在している。強固にして強靱な絆で魔の手から護られていた国、アルスヴィド。「奇跡」がかの国を幾度と救った事実からも、如何に神に愛されているかという証に繋がる。

——天とは別の世界から、『魔王』と呼ばれる闇が降臨した日までは。

魔王の出現から約10年間、世界は魔王の支配下となる。

——中略——

アルスヴィド王国ヤーレム王歴18年、一人の娘が魔王の前に立った。

髪は白金、瞳の色は緑柱石。現アルスヴィド国王ヤーレムの十三番目の娘。

王が即位した年に生を受けた娘、名はスノウティナ。
神々の奇跡と称される美貌と、柔和な笑顔が見る者を魅了する、
美しい娘である。

現在も城の謁見間に宮廷絵師によるスノウ王女の肖像画が優雅に
微笑みかけている。

今となつては、その絵の他に王女の容貌を知る術がない。

魔王の前に立った王女は、その美貌と何者にも屈せぬ真心によつ
て、終には魔王の心を動かしたという。

そんなスノウティナ王女の勇気を、魔王は愛し、欲した。

詳細は誰も知らぬ。

何故ならば、10年間アルスヴィドを覆っていた暗雲が晴れた日、
王女と魔王の姿も消えたのだから。

救国の女神、スノウティナ。

その名はアルスヴィド王国をはじめ世界中に永遠と語り継がれる
であらう。

リム・マーティオス署

「新アルスヴィド伝記」より抜粋

* * *

「なーにが『詳細は誰も知らぬ』よ。リムの奴、今度会ったら問い

詰めてやるんだから」

辞典と呼ぶには些か薄い書を乱暴に閉じそれを手に立ち上がると、娘は靴音を高く鳴らしながら広い部屋を横切った。

部屋の壁一面に書棚がある。

今朝届いたばかりのこの本を何処に仕舞おうか、暫し逡巡した。

「こんな本、雑誌の隣で充分よね」

歴史書の棚になど入れてやるものか。

無然と呟く娘だったが、「新アルスヴィド伝記」の隣に「熟女VS眼鏡っ子？　〱オムライスに愛のケチャップ〱」の背表紙が隣に並ぶのを見て、その表情を和らげた。

「ま、このレベルでしょ」

「何のレベルなの？」

「……げ」

音もなく、気配もなく。

割れた空間から青年が出現する。

しかも、娘の真後ろに密着する形で。

人として有り得ない形の出現方法に慣れているのか、娘は驚く様子がない。

途端に輦められた娘の眉間を見れば、少なくとも男の行動を歓迎していないのだと誰でも気付く。

気付くのだが、彼は取り立てて気にもしていないらしい。

「おはようございます！ あああ……っ！ 今日も美しい！」

とてつもなく見目麗しい青年に包まれた娘は、言葉も発せないよ
うだ。

「……」

「ああ、白磁も見劣る白く輝く肌！」

「……」

「光を凝縮してしまった罪な髪も！ 優秀な妖魔から取り出した希
少な魔石よりも深く煌く瞳も！ なんと罪な美貌なんだ！」

青年は娘の身体を背中からきつく抱きしめると、尚も震えた声で
賛辞を述べる。

毎朝嫌というほど聞きなれているのだ。

しかもご丁寧に、毎朝違う比喻で賛辞を繰り返す青年。

そして、一頻り喋った後に締めくくるのはいつもこの言葉。

「本当に……何と美しいんだ僕は！」

「やっぱりお前か」

娘の強烈な蹴りが青年の鳩尾目掛けて、綺麗に収まる。

「……ぐ、っはぁ!!」

「あらおはよう変態。まだ生きているのね、……チッ」

「……お、おはようございます、スノウ」

腹を押さえ床で悶絶している青年。

浮かべるひくひく喜悦に歪んだ表情に、スノウと呼ばれた娘が舌打ちをひとつ聞こえる様に放った。

……ああ、今日も殺り損ねてしまった。

「どう？ 悶えている僕も素敵でしょう？」

「今度こそ息の根を止めてやるわ」

「あ、待って！」

近くの燭台を振りかざし優美に微笑むスノウはあくまでも本気だ。青年がスノウに見惚れたのは一瞬、咄嗟に「待った」をかける。

「ああ、愛するスノウの頼みなら叶えてあげたいんだ。……だけど、魔王の僕は殺しても死ぬ事が出来ないんだよ、何せ頑丈だから……っ！」

「大丈夫よ、死より恐ろしい思いなんて一杯あるわ」

「し、死より深い恐怖……！」

その顔には恐怖で震えていた。

「是非……！」

否、

歓喜で震えていた。

「……っ、もうほんとと死んでくれないかなこのドM！ 変態！」

「いいっ！ 実にいい……！」

「どっか行けこのミケ！ ミケ猫！ ミケ豚！」

「そう！ そうだよとおお……！」

がしがしと腹を踏みつける娘と、喜び悶える青年と。
目立たぬ様部屋の隅に控える魔王の側近たる青年が無表情に立っている、この奇妙な空間。

この二人があのか「新・アルスヴィド伝記」の主演達であると知れば、人は絶望するだろう。

人間の中では唯一人、事の顛末を見届けたリム・マーティオスが『詳細を知らない』と書に記したのも、民を守るため。

民の『心』を守るためだ。

真実は彼と、魔王の優秀なる側近のみが知る。

* * *

『へえ、スノウティナ王女か。月光姫と評されるのも頷けちゃうね。実に美しい』

『アンタが魔王ミケラヘイムね。一発ぶん殴らせろ』

『え？』

『国民の仇いつ！』

一年前の事。

間髪置かずに決まった右ストレート（眉間直撃）に魔王の肌ならぬ心はぶち抜かれ。

平たく言えば、（人間とは思えない）腰の入ったパンチが魔王のハートを一発KO、一発フォーリンラブ。

何とも簡単に、萌え……燃え盛る恋の業火に焼き尽くされた魔王は、王女の望みである「人間世界を人の手に返すこと」を叶えようと決意した。

『スノウが僕の家と一緒に暮らしてくれるなら、魔界に帰っちゃおっかなー（はあと）』

『——分かりました。民の為に、王族の一員たる私が……！
三食昼寝つきジムとエステとカラオケとショッピングが出来てウォーターベッド常備の快適環境を提供するならまあ考えてやってもいいわ』

『ええええっ！ スノウ様正気ですか！？』

『ああいいとも喜んで！』

『ほ、本気ですか魔王様！？』

互いの側近が慌てるのを他所に、こうしてアルスヴィド王国スノウティナ王女は、暗黒の魔王ミケラヘイムの元へ嫁ぐのでした。

「ああ愛しき僕のスノウ！」

「いいから離れてよマジっざいっ！」

「照れてるスノウも美しいっ！　僕ほどではないけど……っ！」

「くたばれ」

めでたしめでたし？

02・触ってみる

オーク材を使用したドアは、その大部分をユリの花をモチーフとした繊細な透かし彫り技法で作られている。

ユリの一部に、光を反射する角度によって色が変わるという珍しい――玉虫のような光沢のガラスが嵌め込まれている。これは魔界にしか存在しない最高級品だ。

最初に訪れる者は扉の前で溜息が出るという。

「この扉の中に住まう者は上級魔族に違いない」

「そう言えば脆弱な人間の娘が魔王様を誑かしたと噂があるが、もしやここに……？」

「まさかとんでもない、あれは人間どもの虚構に過ぎない」

「そうだ。あの魔王様ともあろうお方が……」

とか云々。

滅多に開かないそこを遠視や姿鏡で眺めながら、魔族の間で論議が重ねられているらしい。

そんなとある日の穏やかな昼時。

城の最上階に位置する部屋の外に、少ない訪問者である青年がドアを見上げた。

その漆黒が映える端麗な面持ちに微笑を浮かべながらドアをノックし　　ようとした手を下げて、ノブを回した。

* * *

神息の吹く国、アルスヴィド。

魔を狩る神族の守護を幾千年と受けし豊穡たる地であつたかの国も、今や面影はない。

天とは別の世界、闇の国から圧倒たる魔力の持ち主が姿を見せたことによる。

絶対的な力と美を誇り、世の全ての知識と闇を持つ魔王と呼ばれし美しい存在は、アルスヴィドを護る神の息吹を忽ちの内に消滅せんとその力を奮い、人心に恐怖を植えつけた。

世界を闇に染め、染まりゆく時。——アルスヴィド王国ヤーレム王歴18年。

人間世界の王国から一人の娘が魔王の元に跪いた。

アルスヴィド国王ヤーレムの十三番目の娘。名はスノウティナ。後に「救国の女神」と讃えられる娘は、脆弱な人間ながら神々の寵愛を一身に集めた光の如き容姿を誇っていた。

闇に潜む者達は語る。

脆弱な人の身であるものの、否脆弱だからこそ、娘は我が魔王の隣に相応しい美を持っていた。

我が王の趣味は極上だ。つまり、何処を取っても我が魔王は最高である！！

ソランジル署

「ミケラヘイム様万歳」より抜粋

* * *

「何が『我が王は最高』よ。ただの変態魔王じゃない」

「誰のこと？」

唐突に降ってきた声に勝手に反応する様に身体が出来上がっているらしい。

部屋の主スノウティナは振り向くことなく、近くの使っていない燭台をぶん投げた。

狙い違うことなく向かっていった。が、当の侵入者が避ける事など百も承知、最初から牽制目的なのだから。

「腕上げたね。危うく刺さる所だったよ」

「ほんつとに残念ね、一度でいいから刺さってくれない？私の為に」

「君の愛がいつも突き刺さっているから余裕ないんだよ僕。……ごめんね」

のほんと茶化した口調を披露した青年は、燭台をぶん投げた女の背後から肩を抱き、その手元を覗いた。

「ふうん。ソラの本なんて読んでたの？他の男が書いたものとか、ちよつと妬けるな」

「ご勝手に。くだらない本を手にしてしまっただけよ」

「くだらない？よく書けてるじゃないか」

「へえ。あんたの世界じゃ、嘘を並べるのが『よく書けてる』のね？」

「スノウ？」

スノウ。

そう呼ばれた女の頬がひくりと動いたことから、恐らく彼女の血管は五本程ぶち切れたであろうと思われる。

その証拠に、凄まじいスピードでこちらに飛んでくる分厚い書物——「ミケラヘイム様万歳」を見つめながら、青年は軽く身を翻した。

本は通り過ぎ、背後でぼすりと壁にぶつかった音。

物騒な光景なんてはじめからなかったかのように笑顔を崩さずに。

「嘘なんか何処にもないでしょ」

「あんたの目は節穴ね」

ああ怒った顔も可愛いなあ、と女に見惚れながら男は言った。
不安定でギリギリの均衡を保つことすら危うい彼女の心。
それが青年の馴染み深い魔力の暴走に似ていて心地好い。

男は眼差しにほんの僅か力を込める。

すると、壁にぶつかり無残な姿となった先程の本が、手元に移動した。

「ふむふむ」ともう一度目を通して青年は首を傾げる。

「節穴ってさ、木の幹に開いた穴だね。僕のスペシャルウルトラキュートな瞳と節穴とやらの何処に共通点を見出したのか知らないけれど、スノウが望むなら、今すぐ世界中の節穴を集めてあげてもいいよ」

「望んでるわけないでしょうっ！」

「えー……僕が居ないときに代わりになるかなって。スノウが寂しくないでしょ」

心底アホだこいつ。

スノウティナは絶対零度の視線を投げた。眼差しで殺せるなら、今までに1000回は殺人を犯していると自負できる。

そう。こんな男を無視すべきなのは理解している。

……けれどその拳句とんでもないお土産、つまり「世界中の節穴」を持ち込みかねない危険を孕むのは御免だ。

部屋中に木材を積み上げるのは嫌に決まっている。

彼ならやりかねない。ミケラヘイムに不可能は殆どないのだ。

人々が最も恐れ、神々でさえ迂闊に近付かぬ脅威の存在——それが魔王。

それは知っている。けれどスノウからすれば、どう頑張っても評価しても変態以上の存在に考えられなかった。

その反応こそが、魔王の琴線を震わせる材料となって居ることも、知らずに。

それも被虐心という名のスイッチをぐりぐりと押しまくっているとも。

「スノウの事だってちゃんんと真実を記述してるでしょ。だって本当に綺麗なもの。うん、僕の次にね！」

「消えるナルシスト」

ああ、と男は陶然とする。

この何処までも冷たい視線が新鮮で堪らない。

姫君らしからぬ罵声と、ドレスの裾から繰り出される蹴り。

その白く滑らかな肌と完璧な黄金ライン、蹴り上げた時に仄かに香る甘い花に似た香りも。

「んーっいいね！ ツンデレ最高！」

己が身を抱き締めながら身を振りだした青年を足蹴にしてやろうかと思ったが、止めた。
そんな事をしたってこの男を調子に乗せるだけだ。流石に学習している。

結局スノウティナが何を言ったところで、自我絶賛スイッチが入った青年には通じないのだ。

「はあ……、——なっ!？」

スノウティナが溜息を吐いた瞬間、身を強く引かれる。
気を抜いた隙を狙ってミケラヘイムに拘束されたのだと知るのは直後のこと。

「ああ、いい匂い」

「はあ!？ やっ、……はなしてっ!」

「やだよ！ 離れたら次はなかなか触らせてくれないでしょ!」

「当たり前だこのド変態!」

「んふふー、スノウって結構あるよね。柔らかくって気持ちいい」

「……………」

「むにむにしてる。いつ揉んでも最高だよ」

人間だろうが魔族だろうが男には決してない弾力をややわと揉むミケラヘイムの腕の中から、期待していた反応が返ってこない事に首を傾げた……その時。

「ミケラヘイム？」

「……え？」

ざわり、空気が凍りついた。

「あ、はい えーと、冗談だよ！ 冗談、あはは」

「 」

冬でもないのに。

更に言えば此処は魔王の居城なので季節なんてないのだが、見えちゃうダイヤモンドダスト。

彼女から生まれるものは冷氣であろうともこれ程に美しいのか。と感動したのは本人のみぞ知ることだ。

「ねえスノウティ、——」

「刺殺撲殺絞殺熱傷死圧死、どれがお好み？」

「……っ」

こちらを見上げ燦然と艶やかな華の如く微笑んだスノウティナは女神を思わせ、ミケラヘイムの意識を根こそぎ奪う。

こくり。と、反射的に唾を嚥下する音が束の間の静寂に響いた。

「今なら魔王だろうが殺れそうな気がするわ」

「殺れそう」を「やれそう」に都合よく脳内変換したミケラヘイムが苦悶の、否。

恍惚とした表情と共に口を開いた。

「もっと激しいのをお願いします」

この日の午後、魔王の城が震えたと公式歴史書に記された。

H
a
p
p
y

e
n
d
?

03・恋愛なんて語ってみる（前書き）

大したことはありませんが今回少しばかりお下品なものと、これからの展開で避けられないかもしれないので、全年齢からR15とさせていただきます。

03・恋愛なんて語ってみる

”恋愛”とは如何なるものか。

最近読み始めた人間界の書物に、よく描写される単語だ。

魔族が魔王に抱く従属の意思や”玩具”に抱くお気に入りの感情とは異なるものらしい。

その恋愛とやらは時に奇跡を呼び、時に低俗な魔が好む憎悪と狂気を産みだすという。

突然何だ、と？

例えが欲しい？

……そうか。

では、徹夜して読んだ書による、”恋愛”が人間にもたらす主な症状を私なりに見解してみよう。

- 1・対象物に対し思考を巡らせると心臓（魔族の”核”とは異なる）が痛む。
- 2・対象物を視界に入れると特に動機が激しく、時に涙を浮かべ軽い呼吸困難に陥る。
- 3・対象物の為になら自己犠牲も厭わないと思う（実行に至るケースは殆どない）。
- 4・対象物を相手に様々な妄想をしてしまう。
- 5・そんな自分に浸る。
- 6・寝ても醒めても思うは彼の事ばかり。

7 ・これが恋なのね！　そうよそうだわ！
8 ・だったら、

「告白して彼の身柄をゲットするしかないのよ！　そう決意した力ナは、下校途中のタカシを捕まえこう言った。――あなた私の奴隷になるといいわ、一生飼い慣らしてあげるから。タカシは恍惚の表情を持ってそれに応えた。こうしてタカシは優秀な下僕となりその、」

最後まで言い終わる前に、目の前の青年を無言で止めることに成功した。

ぶん、と思い切り投げつけたカップは顔面を正確に狙ったのに、肌に触れる直前の位置でぴたりと静止した。
勿論、中身の茶はとうに飲み終えている。

魔族相手に当たりっこない。
分かりきっているが、分かっていると我慢できるとは同義語じゃない。

「姫君、恋愛考察の邪魔をするおつもりか」

やれやれと肩を竦めながら、目前で止まったカップをローテーブルにことりと置く。

「全然考察になってないわ気っ持ち悪い！　ソランジル、あんた徹

夜してまで何読んだのよ」

わざわざ自ら説明してやったのに……、と恨みがましい視線を投げられるが鼻で笑い飛ばす。

暇潰しに話に付き合ってやろうと思ったスノウティアは、少し前の自分を叱り飛ばしたいと後悔した。

己が身を抱き締めくねくねと擦りながら、裏声でSM宣言をし始めた青い髪の魔族（しかも美男）。

……を目の当たりにして、鳥肌が立たない自分がいたら拍手喝采をしてやりたい。

「書題か？ これだ」

男は頷くと何もない空間から一冊の本を出現させた。

手渡されたその本のタイトルを見て、スノウティナの手は固まる。

『レンアイからの脱皮——SとMの攻防戦——』

既にタイトルで、恋愛とやらからズームアウト宣言している。

「ベストセラーで当店オススメ！ と人間界の本屋店主（58歳未婚・男）が言っていた」

「……その本屋店主、だから独身なのよ」

「ふふ、驚いたか？ 私は魔族でも人間でいう学者肌らしくてな。こうして人間界への研究に余念がない。この私に掛ければ魔族の知り得ぬ恋愛感情すら深い造詣をもって語れるのだ！ ふはははは！」

「うわ……」

高笑いするソランジルに、ひくりと口元が引き攣った。知らず憐れみの眼差しを向ける。

気持ち悪い。

見た目が主従揃って極上な分、色々残念としか言いようがない。魔王がアレなら側近もコレだ。何というかもう、流石。

そもそもこの男、ソランジルとは今まで必要最低限の会話しか交わしたことがなかった。

深海を思わせる深い青の長髪を頭の後ろで緩く纏め、同色の瞳は酷薄な視線を投げかけていた筈。

嫌悪や憎悪を感じない。

が、魔王の気まぐれに過ぎぬと関心すら抱いていない。普段言葉数の少ない慇懃な態度の側近ではなかったのか。

それなのに、今の状況は何故。

「最悪。あんただけはまともだと思ってたのに」

「何の事だか分からないが。魔王様いわく私は人見知りが激しいらしくてな。打ち解けるまで緊張して喋れない。馴れると話せる様になるんだ、丁度今のようにな」

「いい歳して思春期か」

「失礼な。まだたった500歳の人間界でいう青二才だ」

「変態ナルシストの側近が、ムツツリだったなんて……」

「失礼な姫君だな。だから私はただの人見知りだといっただろう」

「そうそう、ソラは内気なんだよねー？」

その声を聴いた瞬間、スノウティナの形のいい唇から条件反射で舌打ちが漏れた。

一体どこから、誰が、とは今更つつこむまい。

こんな風にドアからでなく空間を飛んで入室できるのは、この部屋を創造した主だけだ。

しかも、ソファに。スノウティナに抱きつくように。

『魔王の花嫁』と言う名の体のいい捕虜に与えられた部屋は、主が許可を出した者以外、足を踏み入れるのはおろか内部を覗き見る事すら不可能な仕掛けになっている。

「お帰りなさいませ、ミケラヘイム様」

「ただいまぁソラ。ね、スノウも僕と同じく寂しかった？」

「一生帰ってこないように祈ってたわ」

「かつ……可愛いつ！ 本当は寂しくても僕を心配させたくないんだね！ 本音を言えない健気なスノウ！ …… あああ、考えただけで興奮するよ！」

「ウザいつ！」

ぎゅうぎゅうと絞め殺さんばかりに抱きつくその腹に、思い切り肘鉄を叩き込む。

うつ、と男が唸る。

どうせ大した衝撃も、痛みすら感じない。スノウティナに調子を合わせているだけだ。

その証拠に、すぐに復活するとスノウティナの白く滑らかな手を握った。

「それはそうと、ソラには気をつけてね」

「はあ？ っていうか手を離しなさい」

「だめ」

振りほどこうとした手は更に引き寄せられ、叶わない。

——いつもと違う。

何かが違う。そうだ、表情だ。

魔王の表情が普段と違うから、スノウティナまでいつもの調子が出なくなる。

対面に座っていた側近が眼を見開いているのも気にせずに、魔王は真摯な面持ちで彼女の手を包み込んだ。

「……ソラにあまり近付かないで」

「な、なに……」

強い眼差し。

ここにきて嫉妬とも取れる発言に、スノウティナは一瞬だけ身構える。

……まさか。それはない。

「だってソラは自称人見知りのくせに、自分が気に入った女をモデルにしてイカガワシイ本を書くのが副業のド変態なんだよ。近付くとスノウが餌食になるもん」

「何を仰る。ミケラヘイム様こそ先日、姫君の足を舐め尽くして蹴られるのと、赤いピンヒールを履かせて背中を踏み躪って貰うのとどちらが快感かと三日間悩み続けて結論が『どちらも甲乙つけられない！』だったド変態ではありませんか」

「そつ、それを言うならソラだって！ 来月発刊する『魔界ピア』の最新号のコラム、あれは痛いよね。ケーキプレイは生クリームよりチョコクリームの方が興奮を掻きたてる根拠について50ページ

の図解入り検証論、だっけ？」

「な……何故それを！？　まだ入稿したばかりなのに」

「ふふん。僕は全知全能の魔王だよ？　大体さあ、イチゴは？　イチゴの重要性に気付かないなんて、まだまだ甘いよね」

「い、いちご……？　確か、人間界の果実でしたか。甘味と酸味が程よくミックスされているという、あの」

「そうだよ。……潰された赤い果肉から滴り落ちる鮮やかな果汁。それが白い肌をたらりと流れてゆく」

「……っ」

「甘ったるい匂いは赤い実から漂うのか？　それとも組み伏せた神秘の肌から？　君はどう思う？　柔肌をキャリス川の流れの如く滑るその極上の雫にゆっくりと唇、——っ！！」

「いい加減にしろこんつのド変態っ！」

「——ぐっ、っ！」

バネ式蝶番の要領で足を振り上げ、ソファに座ったままの状態から見事に鳩尾を蹴り上げる。クリーンヒット。

何が『全知全能』だ。

こんな低俗な会話に振りかざして『全知全能』に失礼な。

「いいっ！ やっぱりこれだよこれ、見たかいソラ？ スノウの蹴りこそ愛情の証！」

片や身悶える魔王。と言つか愛情を与えた覚えは欠片もない。

「そうか……イチゴか！ 盲点だった……っ！！」

片や苦悩する魔王の側近。と言つか随分浅い盲点だ。

今やスノウティナは心底から断言できる。

他の魔族は会った事がないが、トップの二人はただの変態だ。否、ただのではない。真性の変態だ。間違いない。

「ああそうだ、その変態魔王に聞いてもいい？」

「もちろんだよ！ スノウの問いなら喜んで！」

変態魔王呼ばわりでも平気らしい。

再び手を握ってくる魔王を殴りたくなるのを堪えながら、スノウティナは口を開いた。

「あんた全知全能の魔王でしょ？　じゃあ恋愛って何なのか知ってる？」

「恋愛？」

「そう、恋愛」

先程の側近との会話を思い出して振ってみる。

あのくねくねとした側近を思い出すと気持ち悪かったが、全知全能という魔王はどのような反応を返すのだろう。

——魔族が魔王に抱く従属の意思や”玩具”に抱くお気に入り
の感情とは異なるものらしい。

側近の言葉によるとつまり、魔族は恋愛感情を持たない。そういうことだ。

ミケラヘイムは目をぱちくりと瞬かせると、につこり笑って答えた。

「僕がスノウティナに抱く感情」

「……え」

「詳しく聞きたい？　一晩かけて舐め回した後スノウのぐっちょぐちよになったからだに僕のいちも、ぶっ——っ——っ！」

とりあえず、人間の男と同じで魔王でもそこを蹴り上げたら多少はダメージがあるらしい。

「さあてと、読書でもしようかしら？　読書の秋っていうし。魔界に季節はないけど」

恍惚とした顔でソファに沈む美形とその正面で頭を抱えイチゴイチゴと喚く美形を放置して、部屋の壁一面に広がる本棚へと足を運んだ。

その頬が微かに赤みを帯びていたのを、スノウティナは知らない。

それと。

本棚の一行を占めている魔界ベストセラー『熟女VS眼鏡っ子』シリーズが、側近の著であるとも、今は知らなかった。

f r o h e s E n d e ?

03・恋愛なんて語ってみる（後書き）

9月12日改

04・盛り上がる

「ねえ、変態。ちょっと思ってたんだけど」

「んー？」

ソファに寝そべった魔王に、読書用の椅子に腰を掛けながらペー
ジを捲る王女が珍しく自分から話しかけた。

スノウティナが魔王城へやってきて、かれこれ半年。

魔界では昼夜の区別が特にない。

時間の経過を知りたいという彼女の為に、魔王が時計を用意した。
流行の置時計でなく、王女の身長ほどの振り子時計。魔力で動く
それは『お願い』した時間になると小鳥の歌で教えてくれる。

幾つか持ち込んだ私物のうちのひとつ小さな日捲りカレンダーが、
ベッド横の趣向の凝ったテーブルに鎮座している。

眼がくりくりとしたラブリーな子猫のイラスト。

毎日変わるのが嬉しくて、朝起きれば日付を更新するのが彼女の
小さな幸せなのだ。

捲ったイラストは勿論丁寧に保存。

そんな日課だが、王女らしくない地味な趣味なのでバレないよう
に気をつけてくれ、とある意味随分不敬なことを、かつて王女の護
衛役兼幼馴染みにしつこくお願いされた。

故に、王宮でも幼馴染と侍女しか知らなかった、ささやかな趣味
だったりする。

カレンダーを見ると、人間世界ではそろそろ夏の暑さが和らぎ次の季節へと経過する、そんな日のこと。

「勇者」とやらは実在するのかしらね」

勇者、と聞いた魔王の耳がぴくりと震える——訳もなく。さりげなく問いかけながら、些細な変化も見逃すまいとじっと見つめる王女に、身体を起こしながら彼は笑った。

「今度は何を読んで……ああ、クレゾンの本だね。成る程」

クレゾンはユヴェール大陸の中心アルスヴィド王国の南西に位置する小国だ。

特出した産物こそ他国に比べ随分少ないものの、人が生み出す芸術を財産としている。

音楽や絵画の道を目指す者が一度は夢見る憧れの国、それがクレゾン。

芸術の国として有名だが、一部の分野を扱う書家にとっても憧れの地であった。

「あそこの童話は面白いね。」鞭打ち姫と七匹の駄犬”なんて秀逸だなあ。王子が登場するところとか」

「ああ、眠る王女の鞭に惚れて高値で買い取った通りすがりの馬面

王子？ 確か、その金を元手に暴利な金利で金貸しを始めた姫と下僕が、悪い父王から継母を救い出す為に軍事国家を作り戦を仕掛けるのよね」

「そうそう。ラストの”そうして王子と杖はいつまでも幸せに暮らしました。めでたしめでたし”——って所が好きなんだよ。クレゾンの童話は、アルスウィドの本と違って堅苦しくないのいいね」

「アンタが童話まで読むとは想像しなかったわ。意外ね」

「読む？ そんな事はしないよ。こうして手を翳すだけでいいんだ。中身が全部頭のナカに入るから」

「……勿体無い」

魔王の能力の一つなのだろう。

そう言えばまだ自国に居た頃、聞いた事がある。

魔王は触れることなく秘密を暴く、と。

羨ましさよりも、読書の虫を自覚している王女にとって、もし自分が魔王なら耐え難いなと思った。

「勿体無い？」と魔王に問い返される。

「読書ってね、ひとつずつ文字を拾いながら頭の中で構築してゆくよ。学問書でも歴史書でも、童話だって同じ。ページを捲りながら、この先はどうなるのか、この謎はどうやって解明されるのか。

そんなことを考えながら読み進めるの。たった一行に込められた言葉に感銘を受けたり、人生観まで考えさせられたりね。かくいう私も何度、……………だ、だから！ アンタは勿体無いつて言ったの！」

途中からまじまじとこちらを見つめる視線に気付き、語尾が荒くなる。

……我ながら恥ずかしい。熱く語ってしまっなんて。

赤く染まった顔を背けた。

魔王からは、まだ信じられないモノを見るような眼を向けられている。

その眼を止めろ、と言いたいが、言ったら何が返ってくるか予想付く。

「勿体無い、なんて初めて言われた」

「…………何よ、私じゃなくてもそう思う人はいるわ」

「そうかもしれない。でもね、スノウ以外は誰も”言えない”」

魔族には敬意を抱かれ、人には恐れられているからか。

魔王の言葉に含まれた意味——”言えない”——の中身を尋ねようとしたものの、訪れたのは重い沈黙。

どうしてか、聞けない。聞くことを許されない、そう宣言されたかのような。

「勇者は、いるよ」

ややあつて魔王が口を開いた。

「……は？」

「あれ？ スノウつてば、自分で聞いたのに忘れちゃったの？」

「覚えているわよ。いきなり話変えるアンタについていけなかっただけ」

今、王女が読んでいるシリーズ小説も、クレゾンに住む人気想像小説作家の代表作だ。

世界を暗黒に変えた魔王に挑む”勇者”と後に呼ばれる少年の話。勇者と、仲間の亜人——犬族、鳥族、猿人——が、伝説の武器”メロメロリン ソード”という、聞くだけで殴りたくなるような名前の剣を求めて、ダンジョン内に溢れるモンスターをばっさばっさとなぎ倒してゆく冒険談だが、これはこれで面白い。

面白いと思つたのはストーリーそのものよりも、”勇者”という固有名詞。

魔王を殺す事の出来る能力を持った、唯一の希望が”勇者”だ。ある日突然神託を受けるといふ。

突然、神々の加護を授けられて、「魔王を倒せ」と脳裏で誰かが囁く。——決して勇者が妄想癖とか、精神的におかしくなった訳じゃない、らしい。

「その本はね、ただの物語じゃないんだよ。だからスノウが選んだ」

そもそもこの世界には勇者など存在しなかった。

何故ならば、魔王が出現したのは10年と半年ほど前。

それ以前に魔王が存在したという記録はない。

また、魔族の数も非常に少なく、魔域と呼ばれる結界の外に出なければ、人が襲われることもない世界だったからだ。

だからこそ人々は突然世界を闇に陥れた魔王、魔族の王を未知なる物として恐れる。

10年の間に各国で魔王討伐の軍隊を差し向けたものの、誰一人として帰ってきた者が居ないから。

魔王と共に魔界に引込んだ”救国の女神スノウティナ王女”も、ヤーレム王の懸命な搜索をもつてしても、杳として行方が知れないままなのだ。

一応アルスウィドではそういうことになっている。

そんな無敵の暗黒存在を殺せる”神々の祝福”を受けた人間、それが勇者。

その設定を考えた作者の着眼点が面白いから気になった——
のではなく。

ただの直感だ。

「選んだ？ ……さつきから、わざとらしい意味深な言い方でむかつくわ」

ソファから立ち上がった魔王が、ゆつくりと王女に近付く。

ああ、私が引き金をひいたのだ——と確信した。
魔王の中の、奥に位置していた引き金を。

「うん。むかつくように言っただもん」

「語尾がウザイ」

いつもなら此处で蹴りの一発や二発お見舞いしているのに、今は身体を動かせない。

動かないように圧力を掛けられた空間。

誰の力が作用しているかなんて考えるまでもない。

……柔らかな笑みを浮かべる青年が、魔王だ災厄だと恐れられている史上最悪な存在なのは、知っている。

本能が恐れている。

彼がその気になれば、スノウティナというちっぽけな人間なんて一瞬で消されてしまう事も、悟っている。

何故だか、魔王が今、スノウティナの暴言を気に入っているだけ。
だから自分は”救国の女神”と何も知らない民から崇められて、生きていられる。ただ、それだけ。

「ねえ、どうして君を攫ったのか、聞きたい？」

一步、近付く。

反射的にに込み上げる震えを堪えて、魔王を睨み据えた。

「……私にとって愉快な話じゃなさそうね」

攫われた、とは思っていない。

魔王についてきたのはあくまで自分の意思だ。

国を救う為に取引をした、と言えば外聞はいい。少なくとも、民はそう思ってくれているらしい。後世にもそう伝えられるだろう。

——真実は自分だけの胸に秘めているだけ。

魔王の口ぶりが今にもその秘密を暴きそうな気がして、だからやんわりと断った。

「聡明だね。聡明すぎてつまんない。……まあ今はいいか」

また一步。

手を差し伸べたら触れてしまう位置で魔王が足を止める。

いつものように抱きつく事も、胸や尻を撫でながらの変態発言も、今の彼から想像がつかない。

魔王は立っていた。理知的な微笑が口元を彩っている。

「あのね、勇者は居るよ。まだ目覚めていない。勇者担当の神が眠っているから」

「た、担当……」

……神の世界まで当番制なのか。
こんなに緊張感漂ってる中なのに、王女はがっくりと力が抜けそうになった。

「勇者は魔王を殺せる。だから神に眠ってもらったんだよ、勇者を起こせないように」

「卑怯ね。堂々と戦う気概はないの、アンタ全知全能なんでしょうが」

そもそも全知全能なら死なないのでは、とは思っが。

「やだよ面倒臭い」

呆れた。戦うのが面倒臭いから眠らせてると聞けば呆れるしかない。

けれど一番呆れているのは。

「忙しくなったら、こうしてスノウに触れられなくなる」

…… 自分自身が理解できなくなる。

壊れ物のように優しく抱き寄せられると、抵抗する気力すら起きない自分に。

どうせ魔王の手の中に居るのだ。

どんなに足掻いても、きつと逃げられない。逃げる場所なんて、ない。

「…… 馬鹿、万年馬鹿、ぐうたらしてんじゃないわよ。一遍勇者に殺られたら頭もスツキリするんだから、さっさと起こして殺られてこい」

だからせめて、憎まれ口を叩く。

「うんうん、相変わらずスノウの匂いはたまらないね。舐めつくして突っ込んで啼かせて昇りつめさせてあげたくなる」

ちゅっ。

軽いリップ音が聞こえる。

間近で…… 間近？

何故か顔が近すぎる、否近すぎるなんてものじゃない。距離はゼロ。そして唇がなま暖かい。詳しく掘り下げると、生暖かく濡れた感触が唇に残っているのだ。

満足気な顔が離れてゆくのを王女は呆然と見つめていた。

「……」

「ゴチソウサマ」

語尾にハートマーク乱舞な食後の挨拶。

「……っ、今すぐ死ねええっ!!」

魔王城に普段と変わらない悲鳴(?)が響いた。

f i m f e l i z ?

05・従者と王子（前書き）

久々の投稿ですみません。

まだまだ続きます。今回は従者視点。

05・従者と王子

その日、リムは困り果てていた。

「僕が、ですか？」

麗らかなとは言い難い冬の午後、王宮の一室にリム・マーティオスの姿はあった。

謁見の間ではなく王族がプライベートに使用している応接室でリムを待っていたのは、現王ヤーレムの第七王子レインダール。

彼は、第二王妃エレンシアが産んだ長男であり、スノウティナと同母兄でもある。

第七王子でありながら、父譲りの深い洞察力と粹に囚われぬ政治力。

若いが優しく温和な青年は、やや頼りないと評されながらも、将来有望な宰相候補と目されていた。

「ああ。君以上の適任者はいなくてね」

「はあ……」

リムの敬愛する王女の兄であり、王女の次に尊敬しているレインダールからのお願いにも拘らず、快い返事が出来ない。

尤も、王女がそれを聞いても「仕方ないわ」と頷いてくれただろ
う。

なぜならば、”お供”と書いて”猛獣の世話”と読んでも差し支
えないような、面倒極まりない仕事を申し付けられたからだ。

「こちらは今忙しくてね、とても暴走馬鹿の相手は出来そうにな
い。頼むよ」

「……仕方ないですね。スノウ様の為ですから」

レインダールはリムと似ている。

スノウティナを溺愛している一点に於いて、互いに信用の置ける
人物である。

他の虫が付かぬよう、長年結託していたある意味相棒だ。それ故
に彼の願いは聞きたいと思う。例えそれがストレスばかり溜まる任
務であろうとも。

眼裏に愛しい女神の微笑を思い浮かべながら、リムは頷いた。

そもそも、リム・マーティオスはイレギュラー異例の存在なのだ。

くるりと巻いた金の髪。

晴天の空に似た綺麗な碧の眼を持つ愛くるしい童顔の持ち主。

彼はアルスヴィド王国の”救国の女神”スノウティナに忠誠を誓った魔導師だ。

彼の精密な術展開方式は特殊で、発動する時に星の煌きを思わせる鮮やかな力の軌跡を描く。

見るものを魅了させ、彼の魔導術を一度でも受けたものは魂を抜かれると云った、真否が定かでない噂までも存在するほどだ。

王国一の実力者である魔導研究所長が絶賛するほどの魔力保持者であるが、リムは魔導研究所に籍を置いていない。

破格の好条件をぶら下げての幾度とない勧誘にも関わらず、彼は一度たりとも出世に興味を示した事がなかった。

理由は簡潔、且つ明快。

この力は、生涯の忠誠を捧げる王女の為に。
だから力を奮うのは王女に関することだけ。

……とは流石に立場上、貫き通せないのは解っている。

それ故に王女個人だけでなく、王族お抱えの魔導術師という身分と責任を賜っているが、それは王女の親兄弟だから敬意を表しているだけに過ぎない。

リムにとって、王も国もその程度だ。

彼にとって、世界は主人の庭という認識しかない。

客間に控えていた衛兵に名を告げると室内に通された。

「ご機嫌麗しゅう、フェルナンド殿下」

「貴様か。相変わらず湿気た面してやがる。」

客間の豪華なソファに踏ん反り返る青年にじろりと睨みつけられるが、気付いていないフリをして「申し訳ありません」と笑いかけた。

クレゾンの童話に描かれている”神^{エンジェル}の御使い”そのものの微笑みは、殺伐とした空気を一掃した。

事実、隅に控える侍女の頬が紅に染まっている。ソファを独占する男は一層剣呑な視線を投げかけてきたが。

「スノウティナはまだ見つからないのか」

”暴走馬鹿”とレインダールが闇で渾名するこの男、王宮の貴賓として招かれているだけに一般人ではない。

砂漠の国エレーニルの第三王子だ。

名をフェルナンド・ルイ・ノイブルク・エレーニル。

この際面倒なので”暴走馬鹿”と改名すればいいのに、レイン殿下はネーミングセンスが抜群だ……とリムはこの場に居ない王子を心の中で褒めたかどうかは、柔らかな微笑からは伺えない。

「先日も書簡でお答えした以上の進展はありません」

リムが答えると、チツと舌打ちの音が聞こえた。

「役に立てねえ連中だ。……まあ、それ故にオレが来てやったんだがな」

「では調査の為に、わざわざ、お越し下さったんですか？」

「調査じゃなくて討伐だ。婚約者殿を助けるのは当然の義務だろう。それにあの女もまさか救い出したオレを拒むまい」

嫌味というスパイスたっぷりの問いにも気付かず、フェルナンドが頷く。

”元”婚約者でしょう、とか色々ツツコミを入れたいのは山々だが、敢えて「そうですか」と関心無しの一言だけを返した自分を褒めて下さいスノウ様。一瞬だけ意識を魔界へ飛ばした。

「なあ貴様。スノウティナの好みはどんな男なんだ？あれだけ周りを付きまといていたんだ、貴様でも知っているだろう？」

「……付き纏ったのはお前だろうが」

「何か言ったか？」

「いいえ別に。……………そうですねえ」

主人の好みは知らないが、彼女が自ら魔王の元へ下った原因だけは知っている。

毛嫌いされるほど付き纏っているのはアンタですよ。

とは面と向かって流石に言えないので、リムは思慮深げな従者の仮面を被り直して王子に向き直った。

「僕は一介の従者に過ぎないので存知上げておりません。ですが……」

「何だ？」

「恐れながら、私個人の推察を申し上げても宜しいでしょうか？」

「構わん。言え」

「では申し上げます。……スノウティナ殿下は読書がお好きです。伝記や歴史書の類から魔導術学や医学に至るまで、ジャンルを問わない程に。生きた昔話を知りたいからと、我が国の老賢者の話を幾

度となくおねだりになっておられました。ゆえに叡智えいちに富んだ優しい人、読書が好きな人、博学な人、などがお似合いではないかと。……勝手な解釈に過ぎませんが」

嫌味だ。

この傲慢で残忍な第三王子に、叡智も優しさも欠片だって存在しないのは、各国王室関係者の常識なのだから。

「ふむ。いかにも俺のことだな」

「……はあ？」

絶っ対有り得ないっ！

「貴様みたいな下民上がりのガキでも、たまにはまともな事を口にするんだな。ところでエイチとは何の意味だ？」

こいつアホだ！

嫌味が通じない。っていうかまさか自分が賢いと思ってたなんて世界びっくり大百科だ！

どうしまししょう姫様あ！マジで手に負えません殴ってもいいですかいっそ消しちゃいたいんですけど！

「まあいいか。じゃあな」

「え？ ……殿下？」

フェルナンドが立ち上がり扉を開けるよう衛兵告げた。

開け放たれたその先に進む広い背中をそのまま見送りかけて、我に返る。

仕方なくリムも長い廊下に出た。

足早に廊下を進み厩舎に着く。既に馬に跨った格好の王子は、漸く追いついたリムを見下ろした。

「で、殿下！ 魔王を倒すって——」

「は？ 当たり前だ。何の為にオレが来てやったと思っているんだ？」

「……」

「オレ様の剣にかかれば”魔王”の一匹や二匹瞬殺だ。たかだか魔族の分際でスノウティナを欲する輩なんか、滅びればいいんだよ」

そう言ったきり、リムには眼もくれず馬の腹を蹴った。

颯爽と跨る彼は自ら豪語するだけあって、確かに卓越した剣技の使い手だ。だが……。

「瞬殺されるのはお前だよ、フェルナンド殿下」

何も、知らないくせに――。

立ち尽くすリムの空気ががらりと変わった。

瞳の澄んだ翠が段々と翳ってゆく――水面に落ちた墨が染み渡るような速度で、ゆっくりと。

つられて気温が急激に下がった。

成人男子としては些か大きい瞳の色が染まりかけた時、

『――静まりなさい、リム』

頭の中で、自分とは違う声が命令を下した。

「……っ」

リムははっと顔を挙げ、それから深い息を吐き出した。
すると変わった時と同様の速度で、瞳の色が戻ってゆく。

危ないところだ。

怒りのあまり、変質しそうになっていたとは。

「……わかっています、僕は」

まだ、その時じゃない。

幸いにして、空気が剣呑な闇に染まった事態に、近くを通る兵達も気付かなかった。

いつの間にか彼を囲む結界のお蔭だ。

意識を通じ合わせている存在が異変に気付き、咄嗟に魔力を張り巡らせたのだろう。

リムは諦めたように息を吐き、それから右手で反対の手首に触れた。

ひんやりとしたそれは幼い頃に恩人が嵌めてくれた腕輪。

水に似た感触がリムは好きで、力が暴走しかけたときはいつも、腕輪の存在を確かめていた。

その清らかな冷たさが好きだ。王女に似ているから。

「あなたに、生かされてる」

——ねえ。

愚かだよ、フェルナンド殿下。

彼は何も知らない。

世界の闇も光も全てを知らないで、救世主になるつもりでいる。彼だけでない。知らない人間が多すぎる。

そののなんと愚かなことか。

フェルナンドが魔王を倒すことは決してない。

その前に、リムが全力であの”暴走馬鹿”を排除するから。

真っ白な雪の中、孤独に怯えたリムを拾ってくれた、——あ
のひとの為に。

06・魔王の秘密

——魔王って何だと思う？

いきなり問いを投げかけられたのは、スノウティナ王女が本に没頭して随分経った時だった。

顔を上げると窓の外は茜色。

勿論これは自然現象ではなく、魔王ミケラヘイムによるもの。聞けば、日夜問わず闇に浸された世界だった空を、アルスウイドと同じ変化をもたらすよう魔界の仕組みを変えたいらしい。

誰の為かは聞くまでも無い。

王女は尋ねなかったし感想も口にしなかった。珍しく、ほんの少しだけ口端を上げて「そう」と言っただけ。

そんな王女も今の問いには首を傾げた。

「魔王？」

「そう、魔王。つまり僕の事だけど」

「知らない、どうでもいい、興味ない。魔王ってことは、魔族の王でしょ。そしてあんたはただの変態」

「ええっ？ もうちょっと真面目に考えてよ、そんな簡単に答えられても困るんだって！ 最後の変態っていうのは合ってるけどさあ」

やはり変態と呼ばれて嬉しいのかこのドM、と思ったかは定かではないが。

呆れを含んだ眼を魔王に向けると、王女は再び本のページを捲った。

……が、すぐにまたぱたりと閉じられる。

「ちょっと！ 何するのよ」

「だってスノウが聞いてくれないんだもん」

「だからってガキみたいな真似するんじゃないわよ。……ああもう！ 開かないじゃないの！」

「だって聞いてくれないから実力行使したんだもん」

いくら語尾を可愛らしくしたところで似合わない。美形とは言え魔王は男性的な容姿だ。

これがリム・マーティオスならば違和感のいの字も覚えないだろうが。

「私は読書中なの。質問には答えたでしょ、早く開いて」

「やだよ」

「いい加減にしないと蹴るわよ」

「馬鹿だなあスノウは、そんな事で僕を止められるとでも？　寧ろ喜んで耐えて見せるよさあ蹴ってくれないかいっ！」

「うつわ……………流石に引くわ」

これで抱き着かれでもしたら身体が勝手に蹴り飛ばしていた。が、間にテーブルを挟んでたから助かった。

自分は王女であつて女王ではない。

”どちらかと言えばサデイスティックに近い”といつだったカリムには言われたが、自身では至つてノーマルのつもりだ。

暴力や暴言を奮つて喜ぶ性質ではない。

というよりも、王宮に居た頃は暴力など振るつたことなどなかった。

そもそも父と母と兄、それからリム以外でちゃんと話せる人などいなかったのに。

派手な外見ゆえに辛酸舐めてきた。

何をやっても妬みや嫉妬は付いて来た。

見た目だけしか評価されていないのだと絶望して、人前に出るのを恐れていた時期もある。

自分には中身なんて存在しない。

器だけの、空っぽな王女だと――。

本だけが友だった幼少時代を忘れていない。

静かに読書が出来れば良かった、ただそれだけのつまらない女だ、スノウティナ王女は。

——それが、この男に出会ってから調子を狂わされてばかりだ。
否。

初対面で思わず殴ってしまったから。

自分にこんな攻撃的な一面があったなんて知らなかった。

この男に否応もなく引きずり出されている気がして戸惑っている。

「それで？ あんたは何が言いたいの？」

深い溜息を吐きながら、今日の読書を諦める。

ああ、この”チャムリーとチョコレート？ 工場”はこれからいい場面なのに。

工場長チャムリーの政治癒着と原材料の改ざん、更には稚児趣味疑惑。

それらを主人公のメガネが暴くのだ。チョコレート？ の正体は今まで一切の描写がないので、これからの展開を楽しみにしていた。

「あ、ちなみにチョコレート？ を使った完全殺人が起こるんだよ」

「煩い黙れ。これ以上喋ったら許さないからこの無駄な能力魔王^{チート}」

誰が先を言えといったああん？ とこれは以前に読了した人気ア
クシヨン童話”極道のネコとタチ”の登場人物ばりの睨みを利かせ
る。

”極道のネコとタチ”とは、探偵事務所に所属する女性探偵ネコ
とタチがボス（正体は知らない）の為にコスプレ紛いの変装をした

りお色気を使ったりしながら、”893”^{ヤクザ}と呼ばれる極道組織を壊滅してゆく痛快な物語だ。

ちなみに、タチが鞭を振り上げる描写が、個人的なお気に入り場面である。

いやん、とか。睨まれて頬を染めているこの男が理解できない。なので気にしない。無視だ無視。

「……で、結局何が言いたいのよあんたは」

「えっと、”魔王”って言葉は10年前まで存在してなかったよね。なのに今じゃ人間の間で魔王って普通に言われてるでしょ。不思議に思わない？」

「別に？ あんたが自分で魔王だーって名乗ったからじゃないの」

「うーん、それが違うんだな。僕は君の国に行ったとき、一度だって名乗りはしなかったよ。”お前が魔王か？”聞かれて頷きはしたけどね」

だから何を言いたい。

どうも、からかわれている気がする。王女は冷たく言葉を放った。

「名乗らなきゃ誰が言い当てるの。魔族に王がいる事実すら、あんたが現れるまで知らなかったのよ。侵略宣言でどれだけ世界が揺れたか」

そう。

アルスウィド王国が開国して5000年を超えるが、長い歴史の中で”魔王”が現れたという事実は一度もない。

禁書も含め、王宮図書館の殆どの歴史書を読み漁ったスノウだ。自国はおろか他国に至っても、魔王に侵略された、或いは襲われた、という歴史は存在しない。

—— 勿論、古くから魔族は居る。

神々の守護を受けたアルスウィドは過去一度も魔族の被害を受けていない。が、他国の歴史書には必ず魔との戦いの一連が教訓と共に描かれていた。

”魔獣”と呼ばれる知能を有さない異形の獣に荒らされた町や村。高い知能を誇るが滅多に人界に現れない”魔族”と呼ばれる人間そっくりの存在に、誑かされ、国を滅してしまった王。遊び心で焼き尽くされた王宮。

魔族に心を奪われ破滅した王妃。

戯れに誘拐された王女がいた——これはスノウティナ王女も同じ身の上であるが。

彼らは統制のない個であり、団体で行動する事がないとされている。

魔族を統べる王の存在など、十年前まで誰一人として知らなかったはずだ。

「実は過去にも魔王は居たんだよ。終焉国アルスウィドが生まれるずっとずっと前にね」

「……………アルスウイド？」

紡ぐ国名は同じ筈なのに、発音が違う気がする。

王女はまじまじと魔王を見遣る。

今、空気が変わった。

肌に膜が張り付きその外側を冷たい水がたゆたう、そんな冷氣。水に触れないが、全身が水に包まれていると知覚するような心地の悪さ。

……………ああ、またこの空気だ。

身体の中で何かが熱くなった。
まるで、自分の中に何かが蠢いているような。

「過去にも魔王が……………いた？」

王女の問いに「うん」と魔王が頷く。

いけすかないし口は軽く態度も軽い、何かと苛立たせる存在ではあるが、この男は嘘は決して言わない。

何故かそれだけは根拠もないのに確信できている。

王女自身も不思議だが、その一点に於いては信じていられるのだ。

「アルスウイド建国以前に？」

「そうだよ。先代の魔王は居たんだ」

アルスウィドは人間が興した国家の中で、一番古い歴史を持っている。世界一古い国だった。

世界の歴史は即ちアルスウィドの建国年から始まっている。何故なら、建国の祝福に神から”文字”の能力を授かったとされているからだ。

建国年からの出来事を”歴史”といい、それ以前は”神話”という。

神話は教会で神父が子供に聞かせる物語である。

神話が歴史と異なり信憑性に欠けているのは、人が文字を知らぬゆえに歴史書として残せず、口伝だったからだと言われている。

魔王ミケラヘイム曰く”先代の魔王”とやらが現れていたのは建国年以前らしい。

すると神話の時代だということになる。

人がまだ神の手を離れておらず、少数民族だった頃。

「先代の魔王とやらが伝わってないのは、文字がなかったから……？」

「それだけじゃないけどね。これ以上は教えてあげないけど」

「……はあ？」

自分から話題を振っておいて、「教えてあげない」とは何だ。

「だってスノウが僕以外に興味持つのは嫌だもん」

「意味分らない。独占欲のつもり？　そっいうのは思春期だけに
して欲しいわね」

「僕はまだ18年しか生きてないよ。ほら僕、まだ思春期でしょ？」

「なっ、長生きしてたんじゃないの!？」

魔族に属しているのだから、てっきり数百年は生きているものだ
と思っていたが。

「まさか。それに魔王の力を継承したのが10年前だから、魔王歴
は10年だし？　まだ若輩者どころか赤ん坊みたいなものだよね」

「……は？」

「そもそも僕、代替わりする前は人間だったしね」

「……………はああっ!？」

代替わりって何。
力の継承って何。

そもそも人間だったって何。

初耳ばかりの事実には驚きを通り超えて頭が固まった。

「……あんだ、人間だったの………」

「人間だった頃なんてほとんど覚えてないけどね」

そう呟いた声は、しんとした部屋に響いた。

——魔王って何だと思う？

本当に、魔王ってなんだろう。

その質問は簡単に答えられるものじゃない。

06・魔王の秘密（後書き）

説明はまだ続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4802w/>

身悶える魔王の指先

2011年12月19日22時55分発行